

という声も多い。ナショナルチームへの応援を通して自国への愛着を高め、国民を一つにする力をスポーツは秘めている。

日本から来た頼れる空手のセンセイ

「礼！」

白い道着に身を包んだ選手たちが正座で礼をし、空手の練習が始まる。

「センセイ！試合で勝つにはどうしたらいいですか？」

「センセイ！『突き』の技術を教えてください」

「センセイ」と呼ばれ、若い選手たちに稽古をつけているのは、シニア海外ボランティアの近藤如巨さんだ。

ここはヒマラヤ山脈を臨む国ネパール。政府はスポーツを通じて、国民の愛国心の向上と健康増進を図るべく「Vision 2020」を掲げ、特に競技人口の多い空手に力を入れている。しかし、ナショナルチームに選ばれた選手が国際大会で活躍するには、まだまだレベルアップが必要だ。

そこで、09年から2年間、近藤さんが初代シニア海外ボランティアとしてネパールスポーツ評議会に派遣され、ナショナルチームの監督として指導に当たることになった。近藤さんは日本約

40年間、会社員をしながら国内の道場で空手の指導を続け、ヨーロッパなど海外でも指導してきた。定年後は「自分が自信を持てる技術を途上国に伝えたい」との思いから、05年にシニア海外ボランティアとしてスリランカの空手ナショナルチームの監督に。その経験をもとに生かしたいと、ネパールに赴任した。

「急がば回れ」強くなるには基礎から

「選手もコーチも、空手の基本である正しい姿勢での突き、蹴りといった鍛錬を積んでおらず、みんな『我流』でした。それでは本当に強い相手には勝てない」と近藤さんは話す。目標は、インド、アフガニスタン、パキスタンなど南アジア地域の8カ国が参加する「南アジア大会」でのメダル獲得。近藤さんは強化練習を開始した。

彼が心掛けたのは、基礎の大切さを示すこと。「私は彼らより3倍も歳をとっているし、力も弱いのになぜ強いのか。それは基礎をきちんと身に付けているから。突き一つとっても、私と選手ではまったく違います。腰を回転させてスピードをつけつつ、全体重を拳に乗せるものですが、彼らはそれができていない。対戦相手への威力がまったく違う

ことを、実演して学んでもらいました」と近藤さんは話す。

こうした日々の積み重ねこそ、強くなる近道。社会的地位、性別、民族などは関係ない。努力した者がその分だけ強くなるのだ。近藤さんの指導を受け、「武道の奥深さを知り、難しさを乗り越える楽しさも少しずつ分かってきました」と、バネンドラ・オジヤ選手は話す。練習を重ねた結果、その年の南アジア大会では金メダルを3個、銀メダルを2個、銅メダルを1個獲得するという快挙に、国中が歓喜に沸いた。

「国の代表選手を教えることは、指導者冥利に尽きます。自分の持てる技術や知識を伝えることで強くなってほしい」と近藤さん。現在は、再びシニア海外ボランティアとしてラオスのナショナルチームの監督を務めている。ここでも基礎を積み重ねる大切さを伝え、選手の技術向上を目指して活動している。

一国の代表として国際的な舞台で戦うナショナルチームのレベルアップを後押しする。こうしたJICAの支援を通じて、スポーツをきっかけに母国への愛着が広がれば、国民が一つになれる。それは、国が発展する原動力へとつながっていくはずだ。

現在、近藤さんが監督を務めるラオスのナショナルチーム。徹底して基礎から指導する



ネパールの選手に稽古をつける近藤さん。「どの選手もやる気がある。この年寄りに負けるなど叱咤激励していました」



ネパール
from NEPAL

ナショナルチームの育成で国民の結束を高める

スポーツの国際大会に出場する選手は、国民の期待を一身に背負う国の代表。JICAは開発途上国のナショナルチームにJICAボランティアを派遣し、スポーツ分野の人づくりに取り組んでいる。



スポーツを通して国民が一丸となる

オリンピック、ワールドカップ、世界選手権。世界に名だたるスポーツの国際大会には、プロのチームや実業団などに所属する選手が「国の代表」として参加する。

この「国の代表」には、特別な思いを抱く人が多いのではないだろうか。例えば2011年のFIFA女子ワールドカップでの「なでしこジャパン」。普段はサッカー観戦をしない人も応援の輪に加わり、優勝を勝ち取った彼女たちの姿に力をももらった

スリランカの代表選手たちと。「みんな体が大きく、ポテンシャルは高い」と近藤さん



09年から1年半監督を務めたスリランカのナショナルチーム。教え子たちが南アジア大会でメダルを獲得

